

保育室での動物飼育に関する基礎的研究 (第二報)*

二 宮 穰**

(1996年5月7日 受理)

I. はじめに

筆者は前報⁽¹⁾において、幼稚園の保育室で飼育された動物を一年間にわたって調査した結果、3動物門7綱16目を記録し、飼育時の概況や消長を述べるとともに飼育動物の特性を考察した。保育室での動物飼育は、クラス単位でその実状に合わせた活動がしやすく、園児が園庭から昆虫などを持ち込んでくる場合のように、現に示されている幼児の興味や関心に応じて、即座に開始し発展させて行くこともできるなど、主に屋外の共有の飼育施設で飼われる動物(イエウサギ、チャボなど)では難しいことが容易に行えるという利点がある。その一方で、保育室で飼われる動物は特に小型で寿命や飼育に適した期間が限られているものが多いため、消長が激しく、園児や保育者によって時々新しい動物が持ち込まれることで、飼育活動が維持されるという性質が強い。従って、単年度の調査では、結果が偶然によってかなり左右されている可能性がある。そこで、1995年度も同様な調査を継続し、本報において1994年度との比較を試みた。なお、本報の一部は、1996年5月18日の日本保育学会第49回大会において、発表したものである。

II. 調査の概要

1. 調査実施園

'94年度に引き続き、'95年度も本学キャンパス内の十文字短大附属幼稚園において調査を継続した。一学期始業時のクラス編成と在籍園児数は以下の通りであった。

5歳児(年長組)2クラス

(男子15名, 女子17名) (男子15名, 女子19名)

4歳児(年中組)2クラス

(男子17名, 女子12名) (男子15名, 女子17名)

3歳児(年少組)2クラス

(男子12名, 女子8名) (男子12名, 女子8名)

その後、転入出にともない人数に多少の変動があったが、大きな変化はなかった。クラス編成、保育者・職員数とも'94年度と変わらず、園児数は若干減少した。

園内外の環境については前報で概略を述べたので、ここでは繰り返さない。調査期間中、キャンパス内では、十文字学園女子大学校舎(8号館)の建築工事が行われたが、主な工事現場は短大のテニスコートで、もともと日常の保育の中で園児が立ち入る機会は殆どなく、また昆虫を始めとする小動物の多い場所でもないので、本調査に関する限り直接の影響はなかったものと思われる。

2. 調査期間

1995年度、すなわち1995年(平成7年)4月から1996年(平成8年)3月までとした。調査は週1回実施することを目標としたが、実際の調査回数は、一学期14回(未調査1週)、二学期13回(未調査3週)、三学期5回(未調査6週)の合計32回で、'94年度より一学期1回、二学期2回、三学期3回それぞれ増加した。調査間隔はなるべく等間隔になるように努め、当初は週中の木曜日に行うようにしたが、必ずしも計画通りには実行できず、特に二学期以降は不規則になった。

3. 調査方法

'94年度と同様で、各保育室を訪れ、室内やテラスで飼育されている動物を確認し、記録した。飼育状態、例えば、どんな容器で飼われているか、何個体飼われているか、どんな餌が与えられているか、“かくれが”などがあるか、ということも極力記録するように努めた。また、飼育の開始・終了に関する事情や園児の反応なども、機会をみて担任から聞き取るよう心がけた。

何を飼育動物と見なすかについても、'94年度と同じ基準によった。すなわち、多少なりとも飼う意思をもって保育室内またはこれに付随する廊下、テラスに確保されている動物で、具体的には、何らかの容器に人為的に収容されたものや、容器に入れられていなくても飼う意思が明らかなものとした。従って、生きていない動物(死骸、脱殻など)も、飼育動物として記録した場合がある。また、他の動物の餌として与えられたもの、偶然混入したと考えられるものは、その動物を飼う意思はなかった

*A Basic Study of Animal Tending in a Classroom of Kindergarten (2)

**Yutaka NINOMIYA, the Department of Infant Education

と見なして記録から除外した。飼育動物と見なすかどうか微妙なものは、飼育時の状況や、持ち込まれた経緯などからケース・バイ・ケースで判断した。

Ⅲ. 結果及び考察

調査結果は、目(もく; order)⁽²⁾ごとに各調査日に何クラス(0~6クラス)で飼育されていたかをまとめた。一年間32回の調査で記録されたクラス数の総計(累積記録クラス数)は、その動物がどれくらい頻繁に飼育されたか(飼育頻度)を表す指標とした。目ごとの、および各目に属する代表的な飼育動物の一年間を通した消長は付表に示した。

1. 飼育経過

①マイマイ目(柄眼目)

'95年度は、'94年度に比べてカタツムリ類への関心が高かったようで、全クラスで飼育され、しかも調査を重ねるに従い飼育個体数が増加する傾向があった。園内外で採集された個体が、次々と各クラスの飼育容器に追加されて行ったものと考えられる。

4歳児2クラスでは、水槽に土を敷いたテラリウムで飼育され、6月に産卵、7月に多数の孵化が確認された。この2クラスでは、二学期に入ってから飼育が続けられたが、夏期休暇以降、幼個体の姿は殆ど見られなかった。

②ニナ目(中腹足目)

4歳児1クラスで、ウシガエルの幼生を飼育している水槽中にタニシが1個体見られ、オタマジャクシの飼育が終了し、容器が片付けられると共に姿を消した。おそらく、オタマジャクシの飼育を目的とした水槽に紛れ込むか、“おまけ”として入れられるかしたもので、タニシの飼育が主目的ではなかったと思われるが、記録にとどめた。

③ワラジムシ目(等脚目)

4歳児(5月)、3歳児(6月)各1クラスでオカダンゴムシが短期間飼育された。前者では、水槽に土を敷き、サクラの葉やキュウリの輪切りを入れたテラリウムを作って多数飼育していたが、おそらく土の乾燥が主な原因となって、2週間程度で全滅した。後者では、水槽に直接、葉、枯れ枝、クルミの実、板切れ、石を入れた中にダンゴムシを入れ、採取してきた園児が毎朝のように見ていたというが、間もなく逃げるか、死ぬかして姿を消したようである。“ダンゴムシとり”は、一学期の早い時期から晩秋まで行われていたが、飼育にはなかなか結びつかなかった。

④エビ目(十脚目)

アメリカザリガニは'95年度の調査で、記録クラス数をもっとも多い飼育動物であった。3・4歳児各1クラスで一年を通して飼育続けられたのを始め、5クラスで飼育され、長期間飼われる個体が目についた。また、5~6月には、園児あるいはその家族が野外で捕らえたものを持参する例が目立った。

いくつかのクラスで脱皮が観察されたほか、5歳児1クラスでは6月に雌1個体が産卵し、腹部に多数の卵を抱え込んでいる様子が、園児の絵にも描かれた。この個体は、夏休み中筆者が預かって飼育したが、残念ながら孵化にいたらず全ての卵が脱落した。

'94年度の調査では、一つのアクアリウムに複数の個体を入れて飼育が始まり、共喰いなどの理由で次第に減少し、結局1個体のみが生き残って以後長生きするという例がみられたが、'95年度も同様の例が4例あった。かなり大きな容器で飼育した5歳児1クラスでは、特に“かくれが”を設けなくても一ヶ月以上にわたって4個体が共存したが、最終的には1個体のみ生き残った。また4歳児1クラスでは、あまり大きくないプラスチック製の水槽に、素焼の植木鉢の破片などの“かくれが”を入れて飼ったところ、やはりほぼ一ヶ月にわたって2~3個体が共存した。子どもにとっては“かくれが”のない方がザリガニを観察しやすいが、“かくれが”があった方が飼育しやすいしザリガニも長生きする。“かくれが”なしで1個体ずつ飼えば、観察しやすいし共喰いの心配もないが、産卵し、子ザリガニが誕生するというインパクトのある出来事は経験できない。飼育活動が始まり、継続して行くなかで、その時々の実状に合わせて飼育の目的や方法を柔軟に変化・発展させていく必要があるのではないだろうか。

サワガニは3・4・5歳児各1クラスずつで飼育された。このうち4歳児のクラスでは、6月8日の初記録から夏休みにかけて比較的長生きしたが、夏休み中に死亡した。

⑤トンボ目

5歳児1クラスで、ナツアカネ・ノシメトンボなどのアカトンボ類が2度記録された。これらは、園児が園庭で捕らえたものである。9月18日の調査では、3個体(生存2、死亡1)がカボチャの花と共に水槽に入れられていたが、このうち少なくとも1個体は産卵したとのことで、「トンボがたまごをうんだ」という題で園児が絵を描いている(9月22日付)。11月1日には2個体の死骸の入った水槽がみられた。これらは9月に産卵した個体だということで、11月25・26日の「遊びのあしあと造形展」で、「トンボがたまごをうんだ」ことを描いた絵4枚とともに展示された。

⑥カマキリ目

5歳児1クラスでは、6月初旬に卵鞘から孵化した幼虫のうち1個体が、葉のついたミカンの枝を入れた水槽で飼われていた。この幼虫は与えられたアブラムシを餌に2cmほどの大きさに成長したが、7日には行方不明になった。後にこのクラスの園児がテラスの水道で溺れているカマキリ幼虫を見つけたところ、多くの園児が逃げた個体だと信じて飼いつづけたという。さらに21日にジャガイモ掘りに行った際、園児が畑から2個体を捕まえてきて同じ容器で飼い始めたが、溺れているところを“再発見”された個体は、入れ替わるように死骸となっていた(以上の詳細な事情は担任による)。こうして3ないし4個体が次々と飼育されたが、6月30日には再び1個体となり、7月7日に最後の個体が死亡した。餌としてはアブラムシのほか、ヒシバツタ(6月22日)、小型のコオロギ類(7月7日、食痕と思われる後肢1本を確認)などが与えられたようである。捕まえて飼育容器に入れてしまうと園児の関心は次第に薄れて行き、担任が餌を採ってくるよう促すのに応じて、小さな虫を捕まえてきて与えるという状況だったとのことである。

二学期には4歳児2クラスで短期間成虫が飼われた。餌としてエンマコオロギなどのコオロギ類やバツタ(食痕と思われる残骸を確認)が与えられ、1クラスでは水槽に土を敷き、エノコログサなどを植えた良好なテラリウムで飼育されていた。

⑦バツタ目(直翅目)

一学期には4歳児1クラスでスズムシが飼育されたただけであったが、二学期になって、'94年度同様各種のコオロギ類(エンマ・ツツレサセ・オカメ類など)、キリギリス類(ツユムシなど)、バツタ類(ショウリョウ・オンブ・トノサマ・イナゴ類など)が飼われていた。ヒシバツタは前述のようにカマキリの餌として与えられたものだけだったので、飼育記録には含めなかった。

二学期の飼育記録は9月29日の調査から急に現れ始めるが、バツタとり自体は9月18日、25日にすでに行われていたのを確認している。25日から29日までの間に、短大グラウンド奥の栗林で栗拾いが行われた際、多数のコオロギ類やバツタ類が採集され保育室に持ち帰られたということだが、これが契機となって、その後、採集された個体が頻繁に保育室へ持ち込まれるようになったのではないかと考えられる。なお、園児が外出先で捕らえたものを、持参した例もあった。

'94年度は、園庭の築山周辺や園舎に隣接する草地に雑草が繁り、格好のバツタとりの場になっていたが、'95年度は夏に除草剤が散布されたためか、共に草が疎らで虫影も薄かった。特にキリギリス類は'94年度に比べ明らか

かに少なく9月中にはほぼ姿を消し、以後これらの場所でのバツタとりの対象は、事実上コオロギ類に限られることとなった。

飼育方法については、後述するカブトムシ成虫の飼育に使われた水槽を流用し、雑草を植えた典型的なテラリウムで飼われた例が多かった。

⑧カメムシ目(半翅目)

三学期に4歳児1クラスでクサギカメムシ1個体が、砂を敷き、板片を入れた水槽に収容されていたが、間もなく死亡した。

⑨アミメカゲロウ目(脈翅目)

10月中旬以降、5歳児1クラスでアゲハ幼虫を飼育した水槽内に、クサカゲロウ類の卵(いわゆる優曇華=うどんげ)が付着した植物の葉(ノコンギクではないかと思われる)がみられた。一部は孵化したようだが、ほとんどは死亡したらしく卵の形を保ったまま、葉と共に三学期になっても放置されていた。この葉は園児が持ち込んだものと思われるが、詳細は不明である。このクラスのアゲハの飼育は10月上旬にはほぼ終了しており、この水槽の幼虫も10月2日には蛹化していたこと、このクラスでアゲハに食草として与えられていたミカンとは葉の形も大きさも全然異なることから、優曇華に気がついて園児が持ち込んだ可能性が高いと考え、記録に含めた。

'94年度に飼育されたウスバカゲロウの幼虫(いわゆるアリジゴク)は、'95年度も園庭の物置の下などに多数の巣が見られた。アリジゴクとりは、主に5歳児の男子が時々行っていたが、採取された個体は自宅へ持ち帰られたものが多く、保育室での飼育は確認できなかった。

⑩チョウ目(鱗翅目)

'95年度は、全調査日に記録された。

最も頻繁に飼育されたのはアゲハチョウ類の幼虫(1例だけクロアゲハが羽化した以外は全てアゲハであった)で、5月下旬から10月中旬にかけてどこかのクラスに必ず幼虫があり、5クラスで飼育された。これらは、担任や園児の自宅周辺からもたらされたものがほとんどで、一部は園内のサンショについていたものが飼われた。一つの容器で多数の幼虫が飼われた場合、食草の不足などにより死ぬものも目についたが、'94年度同様、一度飼育が始まると必ず何個体かは羽化に至った。3歳児1クラスでは、担任が'94年度から管理していた越冬蛹が'95年4月下旬に羽化した。また、3・5歳児各1クラスで生じた越冬蛹は、それぞれの担任が'96年度に新しく受け持ったクラスで'96年4月下旬までに羽化している。

アゲハチョウ類以外の幼虫では、モンシロチョウ、ヨトウガ類、スズメガの一種が散発的に飼育された。この

うちモンシロチョウは羽化に至ったが、ヨトウガ、スズメガは幼虫のまま短期間で死亡した。9月11日に5歳児男子が園庭で採集した、セスズスズメ若令幼虫と思われるスズメガ幼虫は、採集した男子を始め複数の園児がその美しさに感心していたが、担任によると、保育室で飼っているうちに園児がどうしても触ってしまい、結局は潰されてしまったという。

二学期には園庭などで捕まえられたチョウの成虫も持ち込まれた。5歳児(モンキチョウ・9月11日)、4歳児(キタテハ・9月29日~10月2日、ヤマトシジミ・10月12日・26日)の4例で、これらはやがて野外へ放されることが多かったようである。

⑪コウチュウ目(鞘翅目)

5月下旬に山形県内の保育所からカブトムシ幼虫が寄贈された。これらは、各クラスに数個体ずつ分配され、腐葉土と共に洗面器やたらいに空けて園児に観察させたり触らせたりした後、水槽で飼育された。成虫は7月18日から現れ始め、夏期保育最終日の7月21日には、5歳児1クラスを除いて出現した。保育終了後、水槽内の腐葉土を掘ったところ、出現しなかった5歳児1クラスを含む4クラスで蛹室内に羽化した成虫があり、結局各クラスとも2~4個体が羽化したことになった。園児がいる間に掘らなかつたことが悔やまれた。また、これらとは別に、4歳児1クラスでは5月中旬から2個体の幼虫を飼育しており、こちらは7月初旬に雌1個体が羽化した。夏休み中、成虫は担任が持ち帰ったり、園舎内の玄関ホールで飼育されたりしたが、ほとんどが死亡し、二学期まで生き延びたのは、雌1個体のみであった。

カブトムシに対する園児の関心は高く、水槽の外からは姿が見えないので、腐葉土を掘って幼虫を取り出すこともよく行われたという。触り過ぎが原因で、死んだ幼虫もいたようである。また、4歳児では、成虫の飛ぶ姿が園児を特に驚かせた他、成虫を長時間手に持っていたり、水槽にへばりつくようにして見ているなど、高い関心を示したのは主に男子だったという。なお、寄贈してくれた保育園の子ども達に対し、お礼の意味をこめて、園児が絵を描いて送った。

カブトムシ以外では、5月から6月にかけて5歳児1クラスでナミテントウの幼虫が飼育された。これは園児が、おそらく短大のグラウンドで採集し、持参したもので、与えられたアブラムシを餌にして数個体が蛹化し、羽化した成虫は野外に放された。

シデムシ類は、主にオオヒラタシデムシが、コオロギ類を飼育している水槽にみられた。園庭ではあまり見かけないが、短大グラウンド奥の栗林には多く、栗拾いやバツタのりの副産物と思われる。

その他の甲虫類は、ごく散発的に保育室へ持ち込まれたに過ぎなかった。

⑫ハチ目(膜翅目)

10月12日の調査時に4歳児1クラスで、砂を入れ、蓋をしたカップが目についた。担任に問い合わせたところ、当日女子1名が大きなアリを捕まえて入れていた、とのことであった。アリはすでに逃げたあとと思われたが、調査当日のことであり、飼う、あるいは、取っておく意思の明らかな例として記録にとどめた。

⑬コイ目

4歳児1クラスで、園児が家庭から持参したドジョオ(食用に購入したものの一部らしい)が飼育された。2日ほどドジョオすくいをして遊んだ後、10個体程度を飼い始めた。夏期休暇前には4個体に減り、このうち1個体が玄関ホールの水槽内で二学期まで生き延び、10月から再び保育室で飼育されたが、冬がくる前に死亡した。

キンギョは、小型のワキンが3歳児1クラス(2回)、4歳児1クラスで飼育されたが、どれもあまり長生きしなかった。

⑭カエル目(無尾目)

4歳児・5歳児各1クラスで、主にヒキガエルとウシガエルの幼生(オタマジャクシ)が飼育された。5歳児のクラスで飼われたヒキガエルの幼生は、ごく短期間で変態を完了して小さなカエルとなり、希望する園児に分配して自宅へ持ち帰らせたという。二学期には4歳児1クラスで、園児が持参したウシガエルの成体2個体が飼育されたが、短期間で死亡した。

⑮カメ目

土や落葉を入れたベビーバス内で冬越しさせていたクサガメ雌雄各1個体は、掘り出して世話を始める(例年5月上旬)以前に逃亡した。このうち雄は4月末、警備員により、雌は6月1日、8号館建設にたずさわる作業員により、共にキャンパス内で保護され園に届けられた。雄の発見で初めて逃亡の事実が判明したため、雌については、園児がカメの探索を呼びかけるポスターを描いて貼り出していた。ベビーバスは、6月より大きく縁の高い容器に買い換えられ、'95年度の冬越しは人目につきやすい4歳児の保育室前のテラスで行われた。

7月17日の朝、何年ぶりかで産卵しているのが発見された。産卵場所を用意していなかったため、卵は飼育容器の水中に産み落とされて転々としており、すぐ砂中に埋めたが孵化には至らず、二学期終了後、処分された。

'95年度は、4歳児2クラスが1週おきにカメの世話を行っていたが、どの学年の園児も餌を与えたり、触ったりしているのが見られた。

⑯トカゲ目(有鱗目)

園庭や短大グラウンドで捕らえられたカナヘビが、3・4・5歳児各1クラスで短期間飼育された。多くは再び野外へ戻された。

⑰インコ目

4歳児1クラスで、担任の持参したセキセイインコ一番（つがい）が、一・二学期に飼育されていた。このうち一学期に飼われていたものは、鳥籠がテラスに置かれていた際、おそらくは猫に襲われて死亡した。二学期に飼われたものは、11月に、テラスに設置されている大型の鳥籠へ移された。これは'96年に繁殖し、5月に幼鳥が1羽巣立った。一学期に飼育を始めた当初は、鳥籠を叩くなど園児の接し方が荒かったため、インコはおびえていたが、繰り返し担任が諭すうちに、次第に乱暴な行為はおさまり、インコも慣れて、園児の手から草の葉を食べるようになった。すると、園児の接し方が一層親密になり、餌を与えたり、汚れた水を取り替えるなどの世話をしようとする子どもが出てきた、とのことである。

をしようとする子どもが出てきた、とのことである。

⑱ネズミ目（齧歯目）

5歳児2クラスと4歳児1クラスでは、'94年度から継続してゴールデンハムスターを飼育していた。また、他の4歳児1クラスと三学期に入って3歳児1クラスでも、ハムスターが飼われた。どのクラスでも園児に非常に人気があり、一人が籠から出すと何名かが周囲に集まって、時には取り合いのようになることもあった。5歳児のクラスで飼われていたハムスターは、1月と春休みにそれぞれ死亡した。前者については、園舎裏に墓が作られ、花が供えられた。この花は、三学期の間に何回か新しいものに替えられていた。

2. '94年度との比較

2年間の調査結果を比較するために、目ごとの飼育頻度などを表に示した。

表 2年間の調査における飼育頻度の比較

飼育動物	飼育頻度							
	1994年度 ⁽³⁾				1995年度			
	累積記録 クラス数	(%)	[実飼育 クラス]	順位	累積記録 クラス数	(%)	[実飼育 クラス]	順位
マイマイ目	38	(9.3)	[6]	⑤	65	(11.4)	[6]	④
ニナ目	—	—	—	—	5	(0.9)	[1]	⑭
軟体動物門小計	38	(9.3)			70	(12.3)		
ワラジムシ目	17	(4.2)	[4]	⑩	5	(0.9)	[2]	⑭
エビ目	41	(10.1)	[4]	③	124	(21.7)	[5]	①
トンボ目	1	(0.2)	[1]	⑯	6	(1.1)	[1]	⑬
カマキリ目	40	(9.8)	[5]	④	16	(2.8)	[3]	⑨
バッタ目	25	(6.1)	[5]	⑧	31	(5.4)	[6]	⑦
カメムシ目	2	(0.5)	[2]	⑮	1	(0.2)	[1]	⑰
アミメカゲロウ目	10	(2.5)	[2]	⑫	13	(2.3)	[1]	⑩
チョウ目	54	(13.3)	[6]	②	69	(12.1)	[6]	③
コウチュウ目	25	(6.1)	[5]	⑧	64	(11.2)	[6]	⑤
ハチ目	6	(1.5)	[2]	⑬	1	(0.2)	[1]	⑰
節足動物門小計	221	(54.3)			330	(57.8)		
コイ目	29	(7.1)	[4]	⑥	22	(3.9)	[2]	⑧
カエル目	29	(7.1)	[4]	⑥	12	(2.1)	[2]	⑫
カメ目	17	(4.2)	[4]	⑩	34	(6.0)	[3]	⑥
トカゲ目	6	(1.5)	[2]	⑬	5	(0.9)	[3]	⑭
インコ目	—	—	—	—	13	(2.3)	[1]	⑩
ネズミ目	67	(16.5)	[6]	①	85	(14.9)	[5]	②
脊椎動物門小計	148	(36.4)			171	(29.9)		
合計	407	(100.0)			571	(100.0)		

'94年度の調査結果では、動物門ごとの飼育頻度の比率は大ざっぱに言って、軟体10・節足55・脊椎35といったところであった。'95年度もこれに近いが、軟体動物と節足動物の比率がやや増加し、脊椎動物は減少した。軟体動物ではマイマイ目の増加、節足動物ではエビ目とコウチュウ目がほぼ倍増したこと、また脊椎動物ではコイ目とカエル目のやや大きな減少が、この変化の主な要因である。

飼育頻度の比率が上昇した、すなわち'94年度と比較してよく飼育されたといえるのは、エビ・コウチュウ・マイマイの3目であった。エビ目は'94年度もよく飼育され、全調査日で記録された唯一の目となったが、内訳をみると記録のほとんどはアメリカザリガニによるもので、この事情は'95年度も変わらなかった。しかし、'94年度は実質4クラスで飼育されたとはいえ、1調査日あたりでは2クラス記録されたのが最高で、クラスごとにみれば消長が激しかった。これに対し'95年度は、2クラスで1年を通して、他の2クラスで10ヵ月にわたって飼いつづけられ、長生きした個体の多かったことが上昇につながった。コウチュウ目は、5月下旬に山形県内の保育所から、カブトムシ幼虫を多数寄贈され、これが各クラスに分けられて一学期終了まで飼育されたことが上昇の原因である。その一方で'94年度にはもっとも飼育頻度が高かった未同定のコガネムシ類幼虫は、'95年度は殆ど記録されなかった。マイマイ目は、2年とも全クラスで飼育されたが、'95年度は6・7月により多くのクラスで飼育されたことが増加の主因である。保育室を回ってみると、'95年度はなぜかカタツムリに人気があって、飼育にも熱心だったように思われた。林園長によれば、「カタツムリとりが始まったら、それまで人気のあったダンゴムシが見向きもされなくなった。」とのことで、園児の間で一種の流行だったのかも知れない。また、カメ目は飼育個体も基本的な飼育方法も変わらなかったが、数字的には若干上昇した。前述のように(Ⅲ. 1.)、7月に産卵が行われたが、二学期には4歳児1クラスが卵を保管し、親ガメは2クラスで1週おきに交代で世話をしたこと、三学期に4歳児の保育室前のテラスで冬越しが行われたため飼育記録に含められたこと、の2点が原因である。園児との関わりにおいては、'94年度と特に変わった点はみられなかった。

一方、飼育頻度の減少が目立つ目としてカマキリ・カエル・コイ・ワラジムシの4目が挙げられる。カマキリ目は、5月以降に孵化するまでの卵鞘の長期保管が'94年度の3クラスから0になったことが減少の主因で、幼虫および成虫の飼育頻度はあまり変わらない。カエル目は、'94年度には幼生が3クラスで2ヵ月近く飼育された

のに対し、'95年度の調査では2日以上記録されたのが1クラスだけだったことが反映されている。コイ目では実飼育クラスの半減が比率の低下につながった。最近新しく飼い始めても長生きしたケースがあまりないことが、飼育をためらわせたのかも知れない。ワラジムシ目は、'94年度はオカダンゴムシを継続的に飼育したクラスがあり、繁殖も行われたのに対して、'95年度は散発的に飼われただけで、実飼育クラス数も半減したことが原因である。

また、ネズミ目は飼育頻度の比率が僅かに低下したが、'94年度と比較して長期間にわたって飼育したクラスが減少したことが影響したものである。

これらに対し、ある程度の飼育頻度があり、比率があまり変わらなかったのがバツタ・チョウ・アミメカゲロウの3目である。バツタ目は、9月中旬から1ヵ月半ほど、園児によって主に園の周囲で盛んに採集されては、保育室に持ち込まれた。チョウ目は初夏から秋にかけて主にアゲハチョウ類の幼虫がよく飼育され、秋から翌年度にかけては越冬蛹が保管された。これらのパターンは'94・'95年度とも共通で、しかも記録された動物の生活史がよく反映されており、屋外での園児の活動の様子と合わせて考えると、今後も再現性が非常に高いものと思われる。従って、野外から保育室へ持ち込まれて飼育される動物として、この2目の昆虫は安定した地位を占めており、子どもと身近な自然の接点として重要な役割を果たしていると考えられる。これに対しアミメカゲロウ目は、'94年度はウスバカゲロウ幼虫が継続的に飼育されて羽化に至ったが、'95年度はクサカゲロウ卵が単に保管されていたのみで、内容的には全く異なっていた。

その他のトンボ・カメムシ・ハチ・トカゲの4目は、2年とも飼育頻度そのものが低く(2%未満)、散発的に保育室に持ち込まれたという域を出なかった。

'95年度には、ニナ・インコの2目が新たに記録された。このうち後者は、担任が目的を持って積極的に飼い始めたものである。詳しい経過は前述の通りであるが(Ⅲ. 1.)、ともに調査結果に大きな影響を与えるほどではなかった。

2年間の調査結果を目のレベルで比較すると、18目中16目が2年とも記録され、上位3目の顔ぶれは変わらず、下位の目も共通性が高いなど、かなり似た傾向が現れているように思われる。同じ園において、同じ保育方針・形態でほぼ同じスタッフが保育に当たっていることを考えれば、また、この2年間で園児の性格や家庭環境などがそう大きく変わったとは思えないことから、この結果はむしろ当然と言えるかも知れない。しかし、前報で指摘したように、保育室で飼育される動物は、寿命

が短かったり、特定の成長段階にあるときのみ飼われるなど、飼育される期間が短く、消長の激しい傾向が顕著である。このことは何らかの形で時折新しく動物が持ち込まれていないと、やがて飼育動物はごく限られたものだけになるであろうことを示している。実際、この2年間の調査では、野外から新しく動物が持ち込まれる機会の少ない三学期には、保育室での飼育動物としては寿命の長いアメリカザリガニ、ゴールデンハムスターや、越冬中の一部の昆虫などが記録されただけであった。

従って、2年間の調査結果に共通性がみられたということは、保育室に持ち込まれやすい動物、逆に持ち込まれにくい動物がかなり決まっていたからではないかと考えられる。中でも野外に棲息するものについては、発見や採集が容易かどうか、興味や関心をひくかどうか、さらにはその興味や関心がある程度好意的な性格のものであるかどうかにか左右されているであろう。

保育室に動物を持ち込んでくるのは、主に園児と保育者であるが、身近に棲息する小動物をとらえて持参するのは園児の場合が多い。以上のことを考慮すると、2年間の調査期間中、調査実施園に通う園児の生活範囲内にみられる小動物や、それらに示される興味・関心はかなり安定していたものと思われる。

IV. おわりに

本報では、2年間にわたる保育室での動物飼育に関する調査結果を比較し、かなり共通性があるという結論を得た。しかし、保育室での飼育活動をより深く理解するためには、飼育動物の持ち込みから飼育の終了に至る活動の経過を、個々の事例に着目して調査する必要があると考えられる。これらは、今後の課題である。

V. 謝 辞

昨年度に引続き、この調査を快く受け入れ、様々な面で協力して下さった、十文字短大附属幼稚園園長の林健造先生、ならびに教職員の皆様にご場を借りて深く感謝いたします。

- 註(1) 二宮 穣(1995)「保育室での動物飼育に関する基礎的研究」十文字学園女子短期大学研究紀要 26,119-128
 (2) 目の名称については、本報では文部省学術用語集(動物学編)に従った。なお、前報との継続性を考え、Ⅲ. 2. では従来の名称を()内に示した。
 (3) 本報 p.175, 訂正を参照。

訂正

前報(二宮 穣, 1995「保育室での動物飼育に関する基礎的研究」十文字学園女子短期大学研究紀要 26,119-128)中に以下のような誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

p.128 鱗翅目 累積記録クラス数
 (誤) 59 (14.3%) (正) 54 (13.3%)

(なお、この訂正にともない、各目および門の累積記録クラス数の百分率が、本報 p.173, 表. 1994年度欄のように若干変化します。順位の変化はありません。)

p.128 膜翅目クロオオアリ 9/12

(誤) 2 (正) 0

p.128 膜翅目タマバチ類 9/12

(誤) 0 (正) 2

p.128 無尾目カエル類成体 累積記録クラス数

(誤) 9 (正) 10

p.128 計 累積記録クラス数

(誤) 412 (正) 407

なお、当然のことですが、報文の最終的な責任は著者にあることをお断りしておきます。

累積記録クラス数) およびその百分率を右欄に示した。目名の下
 (……)は、目としての記録を、細数字(1, 2, ……)は、内訳を表す。

6 月				7 月		
木)	16(金)	22(木)	30(金)	7(金)	10(月)	21(金)
	5	5	6	5	6	3
	1	1				
	5	5	5	5	5	4
	5	5	4	4	4	4
	1	3	2	2	2	1
	1	1	1	1		
	{ 0 1	{ 0 1	{ 0 1	{ 0 1		
	1	1				
	1	1				
	3	3	2	2	2	2
	3	3	2	2	2	2
)	(2)	(3)	(2)	(2)	(2)	(2)
	(1)					

9 月			10 月			
11(月)	18(月)	29(金)	2(月)	12(木)	16(月)	26(木)
2	2	3	2	2	2	1
4	4	4	4	4	4	4
4	4	4	4	4	4	4
	1					
	1	1				
		1	1		1	
		{ 0 1	{ 0 1		{ 0 1	
		5	5	6	5	4
		4	3	5	5	3
		1	1	1		1
		4	5	3	1	1
					1	1
3	2	3	4	3	3	4
3	2	2	3	3	3	3
(1)	(1)	(2)	(2)	(3)	(3)	(3)
(2)	(1)					
(1)	(1)		(1)			
1		1	1	1		1

